

令和8年5月9日(土)

お早うございます。今日は森さんが素読を始めて担当されるので、事前に素読の練習をしなければならないと思い、事務所から信号まで休まず小走りで向かいました。そのおかげで、しっかり素読の練習ができました。

先月、4月26日に湯島聖堂で孔子祭があり、参加して参りました。最後に尚齒会(しょうしかい)の食事会がありました。数え年で80歳以上の方が一つのテーブルに集まっており、私はそこへ案内され、岡田さんとお会いしました。本日お越し戴いておられます。有難う御座居ます。

そのテーブルには90歳を超えている方もおられました。隣の方にお話を伺うと、私はまだ80歳ではありません。ただ数え年で80歳と言われました。

岡田さんには、食事を楽しむきっかけを作って戴き、有難く思っております。そんな出来事がございました。

では、論語の解説に参ります。

- ① ^{そうし いわ}曾子曰く、^{もつ りくせき こ}以て六尺の孤を^{たく}託すべく、^{もつ ひゃくり めい よ}以て百里の命を^{たいせつ}寄すべく、大節に^{のぞ}臨みて^{うば}奪うべからざるは、^{くんし じん}君子人か、^{くんし じん}君子人なり。(泰伯第八・6)

ここでいう「六尺の孤」とは、幼い君主のことを指します。この言葉は以前広く知られていた為、年配の方は六尺の孤(りくせきのこ)と読むことが普通だと思います。

この章句は、洪澤栄一が度々引用した言葉としても知られています。洪澤栄一の口述筆記による著書の中でも、この章句を読むと、自らの若き日の経験を思い起こし、一種の感慨を覚えると語っています。

洪澤栄一は深谷の農家に生まれ、若い頃は尊王攘夷の思想を持ち、『南総里見八犬伝』を愛読していました。その影響もあり、同志を集めて高崎城を占拠し、そこを拠点に横浜へ進軍して外国人を討とうという計画を立てます。

当時は外国人を夷狄^{いてき}と考え、日本を植民地化しようとしている敵だと受け止める風潮があり、渋澤栄一もそうした思想に強く影響を受けていました。

軍資金は親のお金を持ち出して、槍や刀などの武器を買い集め、およそ 100 人の同志を集めました。高崎城攻略の方法も、『南総里見八犬伝』に描かれた城攻めを手本にしようとしていました。

ところが、決行直前になって仲間から今回はやめるべきだと強い反対があり、激しい議論の末、計画は中止となります。結果として、渋澤栄一は罪人になることを免れました。もし実際に横浜で外国人襲撃を実行していれば、すぐに捕らえられ、当時の法律では斬首は免れなかったでしょう。

計画が発覚したことで幕府の密偵が渋澤家の周辺を探るようになり、このままでは捕らえられると考えた渋澤は、従兄の渋澤喜作とともに京都へ逃れることを決意します。親から約 100 両の餞別を受け、あらかじめ用意していた通行手形を使って京都へ向かいました。

京都で特に頼るあてもありませんでしたが、やがて一橋家への仕官の機会を得ます。喜作と共に一橋家に仕えた渋澤は、後に徳川幕府最後の将軍となる一橋慶喜にその才能を認められ、厚い信任を受けるようになります。この事が渋澤栄一の人生を大きく切り開く転機となりました。

慶応 3 年（1867 年）、フランス・パリで万国博覧会が開催されることになり、日本からも代表団が派遣されることになりました。その使節団には、一橋慶喜の弟で当時まだ幼い昭武公が選ばれ、渋澤栄一もその随員として同行するよう命じられます。

「曾子 曰く、以て六尺の孤を託すべく」

六尺の孤には二つの解釈があります。

一つは、「六尺」を文字どおり約六尺（約 1 メートル 38 センチ）の身長と考え、そのくらいの幼い子供、親を失った孤児を指すという解釈です。

もう一つは、一尺=2 歳半と捉え、六尺を 15 歳の年齢に当たるものとして、親を亡くした 15 歳ほどの若い君主を意味するという解釈です。

渋澤栄一は、「六尺の孤」の言葉を読むたびに、フランスで昭武公に仕えた頃のことを思い出したといいます。自分は昭武公を託された立場だったという思いが、この言葉と重なったのです。

渋澤栄一たちがパリ万国博覧会へ赴いた直後、日本では大政奉還が行われ、やがて明治維新を迎え激動の時代に突入します。大政奉還は、坂本龍馬の船

中八策を土台にして進められましたが、倒幕運動も同時に進んでおり、大政奉還の建白書提出と倒幕の密勅は、同時期に出されました。

こうした情勢の変化によって、フランスにいた昭武公は、まさに六尺の孤のように頼る人がいない立場となります。多くの随員は帰国しましたが、渋澤栄一だけは昭武公のもとに残りました。渋澤栄一は昭武公の身の回りの世話をするだけでなく、一橋慶喜から預かった滞在費の管理も任されていました。会計係として資金を運用しながら、昭武公を支え続けたのです。

当初は 5 年ほど滞在する予定でしたが、実際には 1 年余りで帰国しました。約 1 年のフランス滞在中に、渋澤栄一は多くの事を学び、様々な経験を積むことになります。

渋澤栄一がフランスで最も驚いたのは、水道やガスの仕組みでした。蛇口をひねれば水が出て、ガス栓を開けば火がつく。その仕組みを知りたいと思った渋澤は地下を見せてもらい、水道管やガス管が張り巡らされている様子を目の当たりにします。

このような大規模な設備を整えられるのはフランスが非常に豊かな国だからだと思い、銀行家にその仕組みを尋ねました。すると、これらの事業は国が行っているのではなく、多くの人がお金を出し合って会社をつくり、その会社が事業を運営しているのだと教えられます。資金は銀行が集めて運用し、水道やガス、鉄道などの事業は株式会社、当時の言葉で「合本制度」によって成り立っていたのです。

この仕組みに感銘を受けた渋澤栄一は帰国したら導入したいと考え、自ら銀行をつくる決意をします。株式投資についても学び、滞在中に持参した資金の一部を投資しました。帰国時に精算すると、投資したお金は予想以上の利益を生んでいました。

帰国後、渋澤栄一は徳川慶喜から預かった滞在費には一円も手を付けず、旅費や生活費は投資で得た利益で賄っていたことを明らかにします。さらに、残ったお金は困っている人々の為に寄付しました。

このことが静岡の新聞で紹介され、それを読んだ明治政府の役人が、これほどの人物はぜひ明治政府に招聘したいと声を掛け、渋澤栄一が明治政府に招かれるきっかけとなりました。

渋澤がフランスで旅費滞在費を元に投資で資金を増やし、様々な制度を学んで日本でも実現したいと考えようになった背景には、大政奉還によりフランスで孤立した昭武公を守り、支えなければならないという強い使命感が

ありました。その責任感が、事業の仕組みを学び、資金を運用し、成果を上げた原動力になりました。

渋澤栄一は、後に『論語講義』で、「六尺の孤」という章句に触れるたびに、当時の事が思い出され、深い感慨を覚えると記しています。六尺の孤は、それほどまで渋澤の心に深く刻まれていたのです。

本日はとても良い章句を選ばれたと思います。

「以て百里の命を寄すべく」

百里ほどの国の政治を安心して任せられる人物であるという意味です。当時としては相当な規模の国を指します。渋澤栄一は、この百里の国を日本に当てはめて考えればよいと説明しています。

「大節に臨みて奪うべからざるは、君子人か、君子人なり」

大きな出来事や困難に直面した時でも、自分が正しいと信じることを決して曲げない、という意味です。

渋澤栄一の解釈に戻りますと、「大節」は、徳川慶喜が大政奉還を行い、徳川幕府の時代から朝廷を中心とする政治へと大きく変わったことを指しています。まさに、世の中を大きく揺るがす出来事が起きたわけです。

徳川昭武に付き添っていた人達は次々と帰国しましたが、渋澤栄一は一人残りました。それは、自分が正しいと信じることを守り、最後まで昭武公を支えなければならないという強い信念があったからであり、渋澤栄一はその信念を実際の行動に移しました。

ここは、渋澤栄一が自分自身に問いかけているように読んで下さい。「自分は本当に君子人なのだろうか」もう一人の自分が、「そうだ、お前は君子人と言ってよいだろう」と答えます。一人二役のように自分自身と対話しています。困難な状況に置かれても信念を曲げず、昭武公を守り抜こうとした自分の行動を振り返り、「自分は君子人といってよいのではないか」と自問しているのです。

少し脱線しますが、安岡正篤先生の「六中観（りくちゅうかん）」について、私が疑問に思っていたことをお話します。私は安岡先生の本を書く際にも、この六中観をもとにしました。

私は以前から「なぜ『ろくちゅうかん』ではなく『りくちゅうかん』と読むのだろう」と疑問に思っていました。色々調べても、明確な理由は分かり

ませんでした。

その疑問を石川梅次郎先生に尋ねたところ、「安岡先生は子どもの頃から『りく』と教わってきたから、それがそのまま身についているのだ」と教えて戴きました。なるほど、と思いました。子どもの頃に教わった読み方は、大人になっても自然に残っているものです。

現在では「ろくちゅうかん」と読む人も多いですが、年配の方や漢文に慣れている方は「りくちゅうかん」と読みます。「六尺之孤（りくせきのこ）」も同じように、「六」を「りく」と読む例です。

ですから、「六中観」は「りくちゅうかん」と読むものとして覚えておけばよいでしょう。これは付け足しの話です。

② 子曰く、民は之に由らしむべし。之を知らしむべからず。（泰伯第八【9】）

政治家の方にはぜひ読んで戴きたい言葉です。私自身、この言葉は好きですが、少し注意が必要です。一般の書店に並んでいる本の中にも、原文の「之」を省略して、「民は由らしむべし。知らしむべからず」という形で引用しているものがよくあります。

しかし、原文は「民は之に由らしむべし。之を知らしむべからず」です。「之」を省略すると意味も変わってしまいますので、正確な原文を確認することが大切です。

「民は之に由らしむべし。之を知らしむべからず」という言葉については、特に「知らしむべからず」を、知らせてはいけない、教えてはいけない、という意味で解説している先生が結構おられます。そういう解説を読むと、もう少し勉強して戴きたいなと思います。

「民は之に由らしむべし」を、意味がまるで違いますのでよく中身を考えてみて下さい。

社員が20人、30人規模の会社で考えます。初めは社長が言っていることが分からなくても、社長自ら一人ひとりと話をして、相手が納得するまで説明することができます。そうすると、社長が「こちらへ行こう」と言ったときに、社員も「一緒に行きましょう」とついてきます。これが「民は之に由らしむべし」です。

一方、「之を知らしむべからず」は、社長がなぜそのようなことを考え、そう言っているのか、本当の意図を全ての社員に理解してもらうことは難しいという意味です。一生懸命知らせようとしても、すべてを理解してもらうことは出来ません。分かって貰えないのは悲しい事だと社長が思っている状態を意味しています。

これは、15 年ほど前の話です。当時、私は社員に「将来、日本では今皆さんが使っているお札やコインが使えなくなる時代が来ます。通貨が使えなくなり、食べ物で皆さんに給料をお渡しするような時代が、そのうち来ますよ」と話していました。

そんな話をする社員からは、そんなバカなことが起きるわけがない、ありえない、という反応ばかりでした。それでも私は、何年にもわたって同じことを言い続けました。

そのような中で起きたのが、3.11 東日本大震災です。東北地方を大津波が襲い、町中のガソリンが無くなり、食べ物も無くなりました。コンビニやスーパーから商品がほとんど無くなってしまいました。

そこで初めて、お金があっても食べ物が買えない現実を、人々は目の当たりにしました。

震災後、赤ちゃんのいる社員のお母さんから「ミルクがありません。何とかしてくれませんか」との声があり、本社周辺から、できる限り粉ミルクなどをかき集め、多くの支援物資と一緒にトラックへ積んで仙台、福島、郡山などへ運んだことを覚えています。私自身も、3.11 が起きた直後、家内と一緒に車で現地へ向かい、お見舞いに行きました。

3.11 のようなことが現実に関き、食べ物や飲み物が何も無くなった。国や本社から物資を送ってもらったことで社員も理解するようになり、それ以降、少しずつ私の話に関耳を傾ける社員が増えていきました。

その後、私は昭和 21 年 2 月 17 日に行われた金融緊急措置令についても話すようになりました。まだ大多数の社員の人達は、食べ物はいつでもお金を出せば買えるし、現金は当然のように通用すると思っていました。

ところが、世の中が少しずつ変わってくるにつれて、十数年前に社長が言っていたことが本当になってきた。まんざら嘘でもなかったんですね、と少しずつ受け止め方が変わってきたのです。そうして、以前はありえないと言われていた話にも、社員が真剣に関耳を傾けるようになっていきました。

ということで、「知らしむべからず」というのは、社長がいくら本気で話していても、社員が社長の言うことを本気で聞いてみようと思わなければ、伝わりません。つまり、話す側も聞く側も、どちらも本氣にならなければいけないということです。

政治で考えてみます。「民はこれに由らしむべし」とは、政治家が何を言っているのかよく分からなくても、普段の行動を見ていると、なんとなく信用できるから、この人の進む方向についていってみようと思える。

一方、「之を知らしむべからず」では、いくら政治家が本氣になって国民に伝えようとしても、伝わらなければ意味がありません。

ですから政治家側も、もっと勉強しなければ自分が本当に思っていることを国民に伝えられない。知識だけでなく、きちんと伝えるための話し方も、もっともっと学ばなければいけないということです。

中村天風先生は、話し方を相当工夫しておられたのだと思います。天風先生の話聞いた人達によると、話を聞いている間はゲラゲラ笑って、まるで面白い落語を聞いたように終わるそうです。

ところが、その後「はて、なんかいいことをあの先生は言っていたね」と思い出し、心に一つ二つ残るものがあるから、ちょっとやってみようかとなるようです。

天風先生は、一つでも二つでも、聞いた人の心に残ればいいと思っておられたのでしょう。笑いながら聞いているだけなのに、大切なことが心に残る。それが良いのだと思います。これこそ、政治家が見るべき章句ではないでしょうか。

現在、私は西郷隆盛についての本を書いています。最初は 500 ページを超える原稿になりましたが、そこから削りまして、現在は 485 ページまで減らしました。

「が」にするのか、「の」にするのか、「は」にするのか。ほんの一字を変えてだけで、文章の意味や印象がまったく変わってしまいます。ですから、読む人がサラサラと読めるような、分かりやすい文章にするために、一字一字を丁寧に見直しています。

昨夜も夜中の 1 時頃まで、原稿を直していました。たくさん付箋を貼り、担当している佐藤さんが一所懸命文章を直してくれます。そして、それを再び私のところへ送ってもらい、また私が確認する。その繰り返しを、約 3 か

月続けています。

ようやく最後のところまで来ました。分かりやすい文章を書くということは、決して簡単なことではありません。今、自分自身で実感しているのは、文章を分かりやすくするために、命を削っていると感じます。それほど大変な作業です。

あなたの文章は分かりやすくいいですね、と言って戴くと、私は笑顔で有難うございますとお答えしています。

〈恒例の質問〉

初めて参加される方もおられるので、少し説明します。ここでは恒例の質問を致します。

今は5月ですから、今年に入って5か月弱、自分にとって良い日が続いていると思いますか、それとも悪い日が続いていると思いますか。これを客観的な出来事ではなく、主観で考えてみて下さい。

たとえ会社で悪いことが続いている、ある日道を歩いていて素敵な人を見かけ、今日はいい日だなと思ったのなら、それもいい日です。5か月弱の間に、いい日が一日でもあったと思えたら、私はいい日が続いていると考えて結構です。

もう一つ、「今年に入って、嘘をついていませんか。嘘をつかれていませんか」とも聞きます。自分が嘘をついていないことは分かりますが、嘘をつかれていないと言い切るのは難しいものです。例えば、御馳走になった料理があまり美味しくなくても、美味しいですね、と言うことがあります。これも一つの嘘です。

嘘も方便という言葉があります。特に、人の生死に関わる時には、嘘が人を救うこともあります。大切な人が事故に遭い、医師から今晚が峠だと言われたとしても、その人には「お医者さんが大丈夫だと言っているから、頑張れ」と言うのではないのでしょうか。

私は、基本的に嘘をつかないことが大切だと思いますが、人を救う為の嘘には意味があると思っています。

それでは、恒例の質問に参ります。ご自分の答えだけでなく、周りの方がどのように手を挙げているかも、ご覧下さい。

○今年良い日が続いておられる方

○嘘はつかれなかったし、嘘もついていないという方

○有難うと言い続けているし、有難うと言われ続けている方

○身体の手入れをよくやっていると思う方

○自分磨きをよくやっていると思う方

○昨晚寝るとき、満足感を持って寝た方

洗足池という池があります。西郷隆盛が作った漢詩を、勝海舟が氣にかけていたという話があります。

洗足池で石を一つ投げると、パチャンと落ちて、波紋がずっと広がっていきます。目には見えなくなっても、その波はずっと広がっていく。それと同じように、自分磨きを本当にやったのだと思えば、目に見えなくてもその影響はずっと続いていくのではないのでしょうか。

よく「先祖の遺徳」といいます。先祖が良いことをしたから、子孫にもずっと良いことがあるという考え方です。先祖でなくてもいいのです。自分がやったことで、これは良いことをしたなと思えることがあれば、それでいいのです。

洪澤栄一は、「六尺の孤」という言葉を死ぬまでずっと心に抱えていました。それだけ自分は本当に良いことをしたという思いがあり、実際に良い行いであった為、ずっと残っていたのでしょう。

少し話が脱線しますが、西郷隆盛と大久保利通を幼馴染みと書いている学者もいますが、正確には違います。西郷隆盛は下鍛冶屋町で生まれ育ちました。大久保利通は高麗町で生まれ、途中から西郷の住む下加治屋町に引っ越してきました。ですから、幼馴染みというより、刎頸の友や少年の頃からの交わりと表現する方が良いでしょう。

西郷隆盛が亡くなる頃には、大久保利通に対して裏切られたという思いを抱いていた形跡があります。

西郷隆盛が征韓論に敗れて鹿児島に帰った後、大久保利通の直属の部下だった川路利良が、多数の警察官を鹿児島に送り込んだ話があります。表向きは西郷隆盛に会って、戦争等を起こさないよう説得する為ですが、もし政府に対して反乱を起こすような動きがあれば、西郷隆盛を暗殺するよう命じら

れていたともいわれています。この話の真相は、現在もはっきりとは分かっていません。

資料が残っていますが、送った暗殺団の中に「刺殺せよ、つまり刺し殺せという命令だった」と受け取る人がいる一方、「しさつ」とひらがなで書かれているため、「視察してこい、よく見てこい」という意味にも取れます。

私は、西郷隆盛が西南戦争を起こした時に書いた「開戦の理由」にも触れました。西郷隆盛は自分の考えを手紙にして多くの方へ送っていますので、誰に宛ててどのような手紙を書いたのかを調べ、可能な限り多くの資料を本の中に入れました。

また、西南戦争で西郷隆盛が立ち上がり、最後に介錯を頼んで首を落とされた後、山縣有朋がその首を受け取ったといわれています。その時、山縣有朋は背筋を伸ばして涙を流し、「翁から大変な恩顧を受けた」という趣旨の言葉を述べました。そして、西南戦争が鎮定したと報告を受けた一方で、西郷隆盛の遺体に対して無礼があってはならないと、山縣有朋は自身が率いてきた人達に命令したとの事です。

大久保利通については、「大久保利通日記」という記録が残っています。その中には江藤新平のことも書かれています。

江藤新平は、もともと反乱軍をなだめに行ったのですが、逆に反乱軍の首謀者として担ぎ上げられてしまいました。それを知った大久保利通は、江藤新平を捕らえた後現地へ向かい、すぐに裁判を行いました。裁判では本人に何も言わせないまま首を切り、その首をさらし首にしました。さらに、その姿を写真に撮らせ、内務省の応接室に飾り、自分に逆らうとこういう事になると示したといえます。

一方、西郷隆盛の時には、大久保利通は伊藤博文宛てに手紙を書いています。そこには「ひそかに心中には笑いを生じておるぐらい」と書かれています。大久保利通は西郷隆盛のことを思って涙を流したのではなく、心の中でひそかに笑ったというのです。これはどう思いますか？

西郷隆盛は「政府に尋問の筋これ有り」と、大久保利通の政府に対して出掛けていきました。これについて島津久光は、「大久保利通と西郷隆盛の私闘、二人の間の喧嘩であって、戦争ではない」と言っています。島津久光は天皇に対して建白書も出しています。

木戸孝允も自分で出掛け、なだめて止めさせると言っていました。つまり、大久保利通と西郷隆盛の問題を、私的な喧嘩だと捉えていたといえます。

西郷隆盛は大久保利通に対して、「政府へ尋問の筋これ有り」と出掛けていったのは、「嘘をつくやつがあるか、この馬鹿者」と言いたかったのだろうと私は感じています。

ところが、西郷の後を慕って兵隊が大勢ついてきました。周囲から反乱軍になると言われると、西郷は「明治天皇が私を賊だと思ふ筈がありません。天皇陛下は私を『よく来たな』と迎えて下さる」と楽観的に捉えていたようです。

また、大久保利通には、正夢ではないかと思わせるような不思議な話が残っています。西郷隆盛が亡くなった翌年、大久保はこんな夢を見たそうです。夢の中で西郷と断崖絶壁の上で取っ組み合いになり、もみ合っているうちに転落しました。そして大久保は頭を強く打ち、頭が割れて脳漿が飛び出すという、非常に印象的な夢だったそうです。

普通なら、こんな夢を人に話すことはないでしょう。ところが大久保は、郵便制度の創設者として知られる前島密に、「こんな夢を見て、びっくりした」と話していたそうです。

その翌日、大久保が政府へ向かう途中で襲われ、命を落としました。その際駆けつけた前島密によると、大久保は頭を切られ、脳漿が出ていたそうです。その出来事が夢の内容と重なった為、正夢になったエピソードとして残っています。不思議なものです。

〈令和8年を考える〉 丙午（へいご・ひのえうま）

テーマは「令和8年を考える」です。令和8年は丙午（へいご・ひのえうま）です。先ほど比田井さんとも、来年の話や労働観について、少し話をしました。

前書きでは、西郷隆盛について触れています。季刊誌『知足』今年の1月号では、ご存じの通り、高市早苗さんが「働いて、働いて」という言葉を出したことについて書きました。

また4月号では、「トランプ大統領はならず者になった。アメリカはならず者国家になった」と書きました。

現役の総理大臣が「働いて、働いて」と言ったということは、日本の労働に対する考え方を根底からひっくり返したということです。総理大臣自身が考え方を変えた以上、これから世の中もそれに沿ってどんどん変わっていかざるを得ないのではないかと私は思っています。

昨日の新聞に、労働基準法の運用についての記事が出ていました。政府は、特別条項を設けた 36 協定を結ぶことで、臨時的な場合には、1 か月 100 時間未満、年間 720 時間まで時間外労働を認める仕組みを運用しています。

元々こうした仕組みは法律にあるわけで、それをどう運用するかという話です。現役の総理大臣がやると言った以上、ゴールデンウィークから大臣があちこちへ派遣されるなど、労働時間を含めて国民に直結する形で、これから世の中がどんどん変わっていくのだと思います。現役の総理大臣が何かをやると言えば、大きな動きになります。

来年の話も考えていきたいと思っています。毎年テーマが出ますが、そのテーマから見ると、来年は乱れるのではないかとと思っています。私はずっと言い続けていますが、そろそろ大きな戦争が始まる気がしています。第三次世界大戦です。

また、3.11 をさらに大きくしたような自然災害が起きるのではないかといます。これから、だんだん危なくなってくる。ですから、来年のテーマは「乱」が相応しいと思っています。本当は「災い」と言いたいところですが、災いには良い意味がありませんので、「乱」だと考えています。

本日はこれで終了致します。有難うございました。